



青く美しい小泊の海で直也さんの妻・舞子さんは素潜り漁をしている。



1.出港前のリラックスした様子の鈴木直也さん。2.直也さんの祖母が漁師たちの海上安全を祈願して自ら建てた鳥居。3.松還丸に掲げられた大漁旗。

海を走る船の名は「松還丸（しようかんまる）」。5人の親族を海で亡くした鈴木マツさんが、「家族が無事に『マツ』の元に還ってくるように」という思いを込めて名付けた。マツさんの孫で、松還丸の船頭・鈴木直也（48）さんが今回の主役だ。

莫大な借金

青森県中泊町小泊（こどもり）。日本海に突き出た岬からは天気良ければ北海道が見える。ラジオもテレビも北海道の放送局が入る。彼はこの町で漁師の家の次男として生まれ育った。お父さん子で、学校に行く前に海へ出ては、父と一緒に網を引き上げながら「あれタイだね？ヒラメだね？」と当てっこをするのが楽しかった。小学校3年生のとき、帰宅すると部屋が荒れてテレビが転がっていた。普段怒ったり暴れたりするのではない父が、この日は感情を抑えきれなくなっていた。

新しい船を発注し、数千万円を入金したところで造船会社が倒産してしまったのだ。船がなければ仕事ができないので、あたためて別の会社に注文したが、予定していた1.5倍のお金がかかり、莫大な借金を背負った。

この日を境に、鈴木家の生活は一変する。直也さんは毎日同じ服を着て学校に通い、遠足に行く時もおやつはなかった。外食をした記憶もなく、家で食べる魚は臭いが立ち、腐り始めているようなものばかりだった。魚が獲れないときは親戚に頭を下げ、月々の返済をしのぐことも幾度となくあったという。直也さんは、完済するまで借金のことを知らされなかった。

都会での生活

直也さんは高校卒業後、横浜にある映像機器メーカーの工場に就職する。実家では、父と10歳年上の兄が船に乗って年間600万円